

自分のニーズに応じて書く

『専門バカにつける薬』『正義の味方につける薬』

■生活リハビリ研究所

三好 春樹

3月30、31日に開かれた「生きいきの里、出発セミナー」は、じつに面白かった。坂本宗久さんが中心になって企画したプログラムは、全国からやってきた“講師”が入り乱れ、こっちの会場では大笑いが、こっちでは涙が、といった具合。生活の場をめざす「生きいきの里」の出発に適わしい、わい雑さに溢れたセミナーだった。

その“講師”の1人、本誌の連載でおなじみの杉堀孝雄さんが、珍しく人前でしゃべった。どちらかというと彼の文章も、しゃべり方も、内容も、他の人と違って、明るいいものではない。懇親会で「私のことを暗いと、坂本さんが3回、上野さんが4回言った、と日誌に書いておこう」と言って笑わせていたが、彼の“暗さ”は、どこか、老人ケアの深部に通じているようで、私には好ましく思える。

じつは、私も根は暗い。人前に、続いて3日も出ていると、少し自閉しないと精神衛生が保てない。こんな仕事をしているので、人間が好きなのに違いない、なんて言う人がいるが、どちらかというと人間嫌い、自分だって好きじゃない。

だいたい鏡を見てみればいい。浮腫の来たような丸い中年顔はまあしかたがない。それを嫌いというのではない。かつて美少年だった思い出があるだけでも、よしとしなければならぬ。(!?)

我ながら、いやしい顔をしていると思う。ヒューマニズムなんてのは無縁の顔だと思

う。“人格”とか“成熟”ともほど遠い。ヒューマニズムも人格も所詮は“仮面”みたいなものだ、と人のことまで言う気はない。だが、ひねくれた私は、人格と言われればそのウラ側を勘ぐり、成熟と言われれば、墮落と紙一重ではないかと皮肉りたくなる。

そうした自分のなかのいやしい部分、暗い部分を、うっ積させないでバランスを取るために文章を書いてきたとも言える。講演や学会での私が陽に当たっている部分だとすると、“地下水脈”は陰の部分か。それを集めて本にしようというのだから、題名も『専門バカにつける薬』に『正義の味方につける薬』なんてことになってしまう。

だから、図書館や本屋で「何てひねくれた題をつける奴だ、と思って手に取った」なんていう人が読んで、ニタツとしてくれれば私としては本望なのである。

マニュアル本が売れる。具体的方法論をこそ現場は求めているのだから、それはそれで健全なことだ。だから私も、なるべく現場のニーズに応えるよう、具体的な方法論を語り、本を出してきたつもりだ。

その一方で、自分のニーズに応じて書いたモノを発表する場があり、本にすらなって思いもよらぬ多くの人を買って読んでくれるなんていうのは、幸せと言うより他にない。『専門バカ』は4刷、『正義の味方』も再版予定である。感謝。